

忘れえぬ 〈マリア・カラス〉の声

高市 貴久枝

昔話になりますが、40数年前、私が国立音楽大学ピアノ科の3年生の時でした。村田武雄先生の「音楽鑑賞論」の講義で、20世紀の名ソプラノ歌手、マリア・カラスが歌う、ヴェルディのオペラ『オテロ』の第4幕でオテロの妻デズデーモナのアリア《柳の歌》アヴェマリア》を聴きました。なんだか、異様とも思えるほどこころに深く残りました。先生は、毎回レコードをお持ちになり、さまざまな音楽を聴かせてくださいました。大半のものは忘れてしまいました。この《柳の歌》の強烈な声は、今でも色あせることなく、いつまでも耳に残っており、きつと生涯忘れることはないでしょう。カラスの声は、豊かな色彩と陰影を持ち、デズデーモナの哀れさ、寂しさの微妙な心理と感情を写し出していました。

村田武雄先生は、音楽評論家として、今でも続いているNHKラジオ番組『音楽の泉』の解説をしておられ、美しく、流れるような話し方が素晴らしかったです。先生の「声の奥から音楽の内面を表現している、カラスのすばらしさを学生に解ってほしい、感じてほしい」という熱意を強く感じ、このことを覚えております。演奏とは、こういうものなのだなと学生ながら感じ取ること

ができました。自分も人の心に深く残るような、ピアノを弾かなくてはと思いました。今日、昔のレコードのCD化によって貴重な演奏の録音が残され、聴く機会が持てるのはうれしいことです。カラスの声が聴きたくて、図書館から、CDや資料をお借りして、数十年前に聴いたカラスを再聴できました。カラスは一度もオペラ『オテロ』には出演しておらず、この《柳の歌》は、1964年4月に、パリのワグラム・ホール（録音の為だけに使われるホール）に於いて、レッシーニョ指揮、パリ音楽院管弦楽団（変遷を経て、今日ではパリ管弦楽団）によって録音されEMIから発売されたものでした。マリア・カラス40歳のときでした。私は、その翌年1965年に聴いたことになりました。多分、先生は、発売されてすぐにお聴きになり、カラスの素晴らしさを学生に聴かせたかったのでしょう。お気持ちを察することができます。15年前、ウィーンに研修にいった時、夜毎オペラ座に通い、1年で100ほど観ました。これもカラスの声の影響でしょうか？これからも深くこころに残る音楽にめぐりあえることを願って！

● たいちちきくえ 本学准教授(ピアノ)